

社会貢献が会社を支える力に

ファンケル



ファンケル副会長
宮島 和美さん

「無添加化粧品」を開発、販売して一躍、その名をとどろかせたファンケル(横浜市中区山下町)。その後、サプリメントや青汁、発芽米といった健康食品の分野にも進出し、売り上げを伸ばしている。一方で、「企業価値」を支える大きな力になるさまざまな社会貢献活動にも力を入れている。その思いを宮島和美副会長に伺った。(敬称略)

——多くの化粧品や健康食品などを毎年、県共同募金会へ寄付していただき、ありがとうございます。

宮島 お役に立てれば幸いです。

——昨年度は洗顔クリームとファンデーションを多数寄付していただきました。

——いただいたご寄付は、募金会で県内の児童養護施設や母子生活支援施設、DV(ドメスティック・バイオレンス)被害者支援施設、難民定住支援団体など233カ所へお届けいたしました。どこでも大変に喜んでいただきました。

宮島 それを聞いて、こちらもうれしいですね。

——社会貢献活動は、ずいぶん早い時期から始められたと伺っています。きっかけはなんでしょうか。

宮島 創業者の池森(賢二・現会長)の強い思いがあります。

池森が縁あって、横浜市内の重度障がい者の施設を訪れる機会があり、世の中にはこうした施設も運営されているのか、何かお役に立てればと始めたのがきっかけです。この施設とは現在まで31年間、交流、支援が続いています。

——そんなに長く続いているとは。素晴らしいですね。

宮島 池森は早くに父親を亡くし、母親の手で育てられました。成長していくなかで、人の親切、思いやりが身に染みている。今は、恩返し気持ちも込めて、社会に貢献しようとしているのではないのでしょうか。

——なるほど。

宮島 池森は1980年、化粧品販売を個人創業し、通信販売を始めました。当時、化粧品公害という言葉が使われる

ほど化粧品の肌トラブルに悩む女性が多かった。その大半が、化粧品の使い過ぎや、防腐剤をはじめとした保存料に原因があると見極め、無添加化粧品に行きつきました。

——それまでの常識を覆す発想だったのですか。

宮島 池森はそもそも、創業の理念に「正義感を持って世の中の『不』を解消しよう」を掲げています。

——「不」とは？

宮島 不安を安心に、不満を満足に、不便を便利に、です。当社の商品やサービスはすべてこの理念に基づいています。

——社会貢献に力を入れているのも、その一環なのですか。

宮島 社会貢献は、活動を前に進めていく中で「企業価値」を支える力になると考えています。当社は「もっと何かできるはず」を経営の理念にしていますが、同じ名前を付けた「もっと何かできるはず基金」もつくりました。

——従業員にも親しみやすい名称ですね。

宮島 ええ。基金は従業員がひと口100円から、気軽に給与天引きで寄付できる仕組みです。従業員の8割が加入しています。他の企業での加入率は2割くらいだと聞いています。



ファンケルセミナーでメイクの仕方を指導



池森会長が寄付を始めるきっかけになった重度の障がい者施設「訪問の家」でクリスマスの食事会交流

継続が大事、従業員も積極的に

——ほかに、どんな事例があるか、ご紹介いただけますか。

宮島 長く続けている活動に、「ファンケルセミナー」があります。1988年から始めて30年目になります。従業員のボランティアが、高齢者施設や特別支援学校を対象に、身だしなみやメイクの仕方を指導しています。セミナー開催は最近では年間150回前後、参加者も3000人を超えています。

——長く続けている活動が多いんですね。

宮島 ええ。継続はとても大事だと考えています。ほかには「ファンケルキッズベースボール」も開催しています。巨人軍前監督の原辰徳さんを総監督に、元プロ野球選手を講師に招いて、小中学生の野球少年を対象に教室を開いています。教室に加え、使わなくなった野球用



南米のペルーで初めて海外少年野球教室を開催。巨人軍前監督の原辰徳さんが指導(2017年11月。写真提供:報知新聞社)

具を参加者から寄せてもらい、用具が不足している国へ送る活動も。2011年度から数えて17カ国へ合計2万7500点贈っています。

南米ペルーには昨年、原さんをはじめ5人の元選手を講師として派遣し、首都のリマで教室を開きました。

——海外にも目を向けて社会貢献を続けていらっしゃるんですね。

多忙な毎日だと思いますが、お休みの時間はどのように過ごされるのですか。

宮島 肩ひじ張らず自然体で、ですね。朝40分ほどのストレッチは欠かさず、これは腰やひざの痛みを和らげるのに効き目があります。ほかには海外のスパイ小説、ヒロ・ヤマガタの絵画作品などを楽しんでます。

聞き手 神奈川県共同募金会・八木 明